

# 沼津の暮らしラボ

## 第4回「循環×小商い」

日 時：令和3年12月13日 17:30 - 19:30

場 所：沼津ラクーン6階

メンバー：

座 長：青木純（沼津市リノベーションまちづくりアドバイザー、(株)まめくらし 代表取締役）

学 識：出村嘉史（岐阜大学工学部社会システム経営学環 教授）

専門家：加藤寛之（都市計画家、(株)サルトコラボレイティヴ 代表取締役）

ゲスト：東野唯史（(株)ReBuilding Center JAPAN 代表取締役）

パネリスト：山本広気（循環ワークス）

オブザーバー：会場に来てくださった方々

### 1. 「沼津市リノベーションまちづくりについて」

（沼津市まちづくり政策課 渡邊主査）

### 2. 講演「多様な暮らしの創造『循環×小商い』」（東野唯史氏）

○座長青木氏からの挨拶

・古材など、一見価値がないと言われるものに、新たな価値を生み出して、それを生業とし、かつ、それを起点としてたくさんのひとを集め、2016年秋からReBuilding Center JAPAN（以下、リビセン）を始めた。そして5年たち、今一緒に働いている方が16名になっている。この発想から5年で、だいぶ定着はしてきた。

そして、沼津の我入道で、循環ワークスがプレオープンしてから約1年。同じような生業が生まれている。これは偶然なのか必然なのかということ、このタイミングでそれぞれを掛け合わせて、皆さんと一緒に感じ取ってみたいと思う。小商いというのは、幅があるが、もはや定義はなくて、新たな産業かもしれないと思う。この5年の取り組みをリビセンの東野さんからしっかり感じ、そして、生まれて1年の循環ワークスの取り組みを皆さんと分かち合い、これから先の発展の形を模索していきたいと思う。

○ゲスト東野氏による講演「豊かな暮らしの創造『循環×小商い』」

## ○地域プレイヤー山本氏講演

### 3. フリーディスカッション

青木氏) 循環ワークスのプレオープンから1年が経ち、このぐらいのタイミングで東野さんが来る方がいいなと思っていた。二人の話で共通していたサポーターの話。すごく大事なポイントであり、従来であれば、組織などを作った場合、事業計画を作り、社員の採用を行い、組織化するというやり方であった。しかし、まず、最初にあるのが、カルチャー、思想、何を発信したいのか。東野さんの社訓と山本さんの家訓が結構似ていて、その根底にあるものに共感する人たちを集めていく過程で、いきなりコストを出して、人を採用することはすごいことであるが、それよりも、まずはその価値観を感じてくれるサポーターをしっかりと増やして土台を作ってる。今日二人が会った時に、話をしているのを聞いていて、実はそのサポーターから働いてくれる人を取りたいとか、そういうサポーターを採用してすごくよかったとかの話をもう少し聞いてみたい。また、東野さんのところは不登校ぎみの中学3年生の女子やアクティブシニアの方が参加しているとか。

東野氏) サポーターズをやり始めた理由としては、以前 Nui. (ヌイ) というホテルを作っているときの話だが、ゲストハウス業界では、ヘルパーという仕組みを一部のゲストハウスが取り入れている。住み込みで、宿とご飯を提供するから、給料を渡さない代わりに4時間くらい手伝ってねというシステム。私は、その文化にずっと触れていたし、結構たくさん来てくれるので、給料をもらえないけど、その仕事を経験したい人は、こんなにたくさんいるんだな、というのがその時の実感としてあった。その後、全国を転々と住み込みで店舗等を作るなかで、いろいろな人たちがたくさん手伝ってくれた。一番は、リビセンを作った時に2か月で500人くらい来てくれたので、お金を渡さなくても、その現場が楽しかったり、ちゃんと僕らが感謝を忘れずにいれば、リピーターとしても来続けてくれるというのもあったので、リビセンの関わりシロとして、アルバイトや社員だと、面接をしていい子をとるぞという風になるが、面接もすべてすっ飛ばして、誰でも来ていいよという場所を一つ用意しておく、みんな参加してくれるし、我々の文化も伝わりやすいので、サポーターズをやり始めた。結果として、採用の時に役に立っているという感じです。

山本氏) 私も単純に、お金をもらえなくても、技術的な何かを我々が提供できるというのもあったし、逆にそういうものがあったら自分も行きたいと思っていた。新しいところを何か作る時に、壁を塗ったりとか壁を壊したりとか。

一番初めに驚いたのが、女の子が大ハンマーをずっと持って、「この棚を壊していいですか？」って言われて、ストレスでも溜まってるのかどうかわから

ないが、理由はみんなそれぞれだが、我々としては片づけが捗り作業が進むし、循環ワークスの理念は伝えていたので、そこから人をつなげてもらいながら、循環ワークスの活動を知ってもらいたいということから始まった。人の力を欲しいと言うよりも、活動を知ってもらいたいという方が強く、それで集めたのがきっかけです。

青木氏) サポーターは繰り返し来る方が多いですか？

東野氏) 多いですね。今はもう働き始めましたが、以前までは、東京で派遣社員として働いていた女の子が、有給を取ってはリビセンのサポーターズに来てくれて、結構参加してくれていた。

青木氏) 循環ワークスも、初めからサポーターで入ってくれていた人が？

山本氏) そうですね、来てくれた人は100人近くいる。そして、今働いてくれている方は、2月くらいからほぼ私と一緒に7割ぐらいいると思うし、結構きつい作業もやってくれた。

青木氏) 参画の仕方というのが変わってきているなと思う。サポーターズだから、参画の仕方のハードルも低い。フルコミットして、がっつりやらなくても、ひとまず来てみて、みたいなところから始まるが、ド本気で一緒にその場に向かい続けると、当事者化してきて、その後、どっぷりと社員として入ってくる人もいれば、ずっと関わりシロを持ちながら定期的に関わって、サポーターズのまま居続ける人もいる。そのように、それぞれの判断基準でいいんだよというのが、いい気がする。

東野氏) みんながサポーターズで、いろんな使い方をしてくれている。大学3年生くらいだとインターンに行く単位がもらえるというのがありますが、リビセンはインターンを受け入れていないが、サポーターズは受け入れているので、それでよければおいでよ、という風に言っている。

青木氏) 出村さんは岐阜大学の教授ですが、どうですか？

出村氏) 是非生徒を送りたいですね。ただ、強制はしたくなく、興味をもつ学生が行ってほしいなというのはある。去年まで、工学部に所属していたが、そういうのに興味がある学生が、不思議とあまりいない。作る側で、ずっと育ってきている子たちが、すなわち、作るためのエリート教育をずっと受けてきているが、その先に作るはないということがわかり、すごい矛盾していると感じていた。今年からは、もっとゆるい学部を作り、そこに所属しているため、やる気のある子たちがどんどん来ている状況なので、面白いものが生まれそうな気がする。

青木氏) リビセンのサポーターズを見ていると、私も知っている人がたくさんいる。いろいろなところで、それぞれの場所を作って活躍している人たちが、必ずリビセンに行っているというのが面白い。文化というか、それがベースになる場所というか、リビセンに行ってから広がってくるのがいいのかなと思った。

環境問題というのが二人の根底にあると思うが、ちょうど今朝のアメリカの竜巻被害のニュースを見ていて、心を痛めた方もたくさんいたと思うし、ビニール袋とかの問題など、他人のようなことでもすべて自分に帰ってくるようなことについて、向き合うか向き合わないか、というだけの話という気がしている。山本さんは話の中で、ある意味メディアのような場所と言っていたし、これからは環境問題を感じてもらえる場所というか、古材を買って帰らなくても、ここにきて自分の中の問いにぶつかってほしいというか、実際に興味がなかった学生の子が、ひょっとしたらどこか引っかかっているかもしれない、ということがきっとある。

必然だなと思って聞いていたが、リビセンが5年前から始まって、日本中からそういう取り組みをやろうという人たちがサポーターズとして通いながらも、それぞれが各地でそういう活動を起こし、そして、それとは別で、山本さんのように、自分でやろうと思い、ハードワークを行いながら、あの場を作り上げた。

東野氏) 本当にすごいと思う。なかなかできない。値付けなど一つ一つ苦戦するし、レスキュー依頼もなかなか集まらないし、売り場作りもなかなか大変だから、人手も集めるのが大変です。よく、サポーターズを呼べばいいじゃんという話もあるが、呼べば呼んだだけ面倒も見なければならぬ。タダで、働いてもらう分、満足度を上げたいと人情も沸くので、その辺のバランスをちゃんととれる人はそう多くはない。それが山本さんはきちんとしてできているなとお店からしっかりと伝わってくるから、本当にすごい。

青木氏) さらに、循環ワークスがある我入道から沼津駅の近くにも、小さく出てき始めていると聞いているが？

山本氏) そうですね、循環ワークスという場所が出来たから、今回、声をかけてもらえたんだなと思っている。今日も来てくれているスタッフの古地さんは、サポーターから始まり、今は働いてもらっているが、私というより彼女に出来高という形で任せてあって、彼女のイメージと循環ワークスの形を、彼女から発信してもらっている。

青木氏) 人を通じて伝播していくんですね。

山本氏) お店というよりも、考えを共感してもらえるというか、こういう生き方があるんだよとか、こういう状況なんだよとかを発信する場所なので、私がずっと走り続けても、それほど広がらない。なので、こういう感じでもっともっと広めていきたい。駅近くでやっている加藤ビルは、我入道の循環ワークスとは違った形なので、是非皆さんにも見に行ってもらいたい。

青木氏) もはや、小商いじゃなくなってきたなという感想です。広がるという意味では、いろいろな企業との関係性みたいなものもこれから生まれると思う。

まさに東野さんの方では、無印良品と始まっている。私の方も、無印良品と連携しており、彼らは感じいい暮らし方と言っていて、環境に取り組む姿勢やアッ

プサイクルは、この共感を生んで広がっていく、これからの感じいい暮らし方であり、そういうことと共通している。今日、紹介されていないが、銀座松屋の話で、銀座のど真ん中の百貨店のフロアーにリビセンが出ていくことのすごさ。例えば、沼津の企業とコラボレーションしていくというのも、ひよっとしたらあるかもしれない。

山本氏) 是非、そういう企業とやりたいし、協力していただきたい。

青木氏) 特にこれからデベロッパーとか、例えば東京でいえば野村不動産がリノベーションに取り組み始めますよとか、コワーキング作りますなど、開発するとき地域ぐるみの活動をセットでやっていくような流れに少しずつ変わってきていて、大きな資本が、どちらかというところからの未来を意識して、SDGs の取り組みも含めて変わりつつある。

沼津でも、新たな住宅を建てる会社が、レスキューとセットでとか、そっちもやるんだけど、もっと環境負荷に関する取り組みを一緒にやってくれませんかとか、そういうのもあるかもしれないと思う。開発する場所で、単純に廃棄するのではなく、眠っているものをちゃんと拾い上げるなど。聞いていれば聞いているほど、循環ワークスは忙しくなると思う。

加藤さんは、沼津のエリアリノベーションに関わっているが、東野さんの取り組みの取材でのエリアリノベーションの動きもあるので、その観点も含めてどうですか？

加藤氏) 二人の話を聞いて、ただただ視聴者として面白かった。二人の前でいうのもなんなんだが、私は、環境、環境というのがあまり好きではない。ビニール袋を無くそうやストローが紙に変わるなど、どうしてもやらされている感が出て、あまり好きになれなし、本当にそうかということもわからない。さらに、企業のイメージアップのためだけの CSR みたいに使われているんじゃないかと思ってしまう。

しかし、二人がやっていることはそうではなくて、見たい風景が先にあり着実にそこに向かって泥臭くは、すごい好きである。今までの環境というものよりは、近い未来はこうなるんだろうなっていうのをすごく感じるし、だからこそサポーターが参加してくれているだろうし、非日常だけど、そうなるだろうなと思えるというか、そういう意味で、自分の中で環境に改めて興味を持てるようになった。環境は大切だと思っているが、得意ではないし、私にはなんか向いていないなと思っていた。おしゃれだからやってるの？とか思っていたが、二人がやっていることは全然違うし、泥臭さと人が見たい風景があり、その間を着実に進んでいっているところが腑に落ちるし、自分の中ではとても共感できたので、環境問題は改めて大切だなと思った。

その中でも、沼津市でやっているリノベーションまちづくりもそうだが、建て

ることや作ることが正義な時代だったけど、今は、建てないことも作らないことも正義な時代になった。つまり、建てるとか作ることには、もう、社会的意義とか理由が必要になってきている。だから、新たに作らない時代には、企業は作ることへの理由が必要になってきていると感じる。何かをやるときに大きなことをやらなければならない時代。建てないことが正義な人たちを、ちゃんと巻き込まないと、自分たちが建てる意義がなくなってしまうている。そういう意味でも時代が変わっていつている中で、新たな近い未来をつかんでいるからこそ、サポーターも集まるし大きな企業もそこに注目している。企業も変わらなければならないから、無印良品とかも常にそれを発信し続けている。つまり、自分たちは店を作って売らないと生きていけないが、そこに社会的意義をどう作っていくかをすごい悩んでいると思うし、そこにピタッと、来ているのではないか。もちろん二人がやっていることだけではなく、我々がやっている「ご近所を素敵に変えよう」という取り組みをやっている中でも、大きな企業がやっていることの先に見えることで、すごく親近感を感じる。いずれコラボしなければいけないだろうなという気持ちになってくる。結果的に、建てる作るが正義から、建てない作らないが正義になっていることが、ちょうど未来を先取りしている人たちにとても追い風になっている。都市計画の中でも、はっきり言って、作るとか、そんな時代ではなくなっていると、二人がやっていることで改めてそう感じた。今は、循環ワークスは企業と組んではいないが、いずれ彼らが組まないといけない時代になると思う。二人のファンになりました。

青木氏) 取り組みに対するファンとみたいなことはやっぱり多いと思う。まさにサポーターズもそういう成り立ちだと思っていて、これを違う人たちがいきなりサポーターズをやりますと言っても全然集まらないと思う。そういう取り組みや考え方を触れてみたい、そばで見たい、自分事に置き換えてみたいと思っている人がサポーターズに入ってくるのではないかと思し、自ずと集まってくる。

昨日やったサポーター感謝祭はどうでしたか？

山本氏) みんなにお返しがしたかったし、以前からやりたかった。まだ、全員来てないので、また何回もやろうと思っている。大盤振る舞いし過ぎて、もうやめたほうがいいんじゃないか論も出ている。

青木氏) 小商いで少しずつ集まってきた資金が、そこでサーっとなくなる。

東野氏) そうなのがちょっとずつサポーターズに広がっていくから、いいと思う。銭勘定できないところとか、やりすぎちゃうところとかが共感を生んでいくのではないか。大きい企業になればなるほど銭勘定などが絡んできて、きちきちし過ぎてくるから、その仕組みの中ではサポーターズは全然うまくいかない。ミスと言えばミスであるが、人情味と人間味というか、その辺の揺らぎみたいなものがきちんと出てくるコミュニティが、ファンを増やしていくと思うから、口酸っ

ぱく言わないようにしている。

青木氏) 余白みたいな感じですね。そう考えると、山本さんは適性があり、このビジネスを違うタイプの間人がやろうとすると支持されないというか、きっちりし過ぎるといやらしく見えてしまう。

加藤氏) 完璧じゃないほうがいい。

青木氏) レスキューしたいのは家主の気持ちというフレーズがすごく印象的でした。これは本当に大事だと思っていて、リノベーションまちづくりに携わっていると、中には、空き家について大家さんはずっと放置していたのだから、ただで貸すのが当然のようなことをいう人もたまにいる。でも、それは正論かもしれないが、それを言ってしまった時点で、何も生まれない気がする。別に放置したくてしたわけではない人はたくさんいて、やむを得ず放置してしまっている状況の人もたくさんいる。まずは、そこからわかってもらわないと、処分したいわけではない人もいると思うし、だからレスキューしてもらえて本当にありがとうという気持ちになる人はたくさんいると思う。

東野氏) 僕らがレスキューするときに買い取る話をしたが、おおむね販売金額の5%でと大家さんにしっかり話をしたうえで買い取っている。これを高くしても安くしても大家さんとしては全く関係なく、買い取ってくれるだけでもありがたいという話であり、僕らが最初に決めた5%という、自分たちが気持ちよく買い取る数字を忠実に守り続けており、先ほどの家主さんに今まで余らせていたからタダでお願いします、という話と同じで、気を抜くと搾取側に回りそうになってしまうという危険なところを常に歩いているから、数を取る人がしっかりとその倫理観を持っていないとすぐにダメになるなというのは、やっていて感じること。

青木氏) そういうことが大事で、やはり続かないとだめだと思うし、お互いにいいバランスで。

東野氏) 戦略的にみると5%の買取金額は軽トラックいっぱい5,000円くらい、トラック20,000円くらいで古道具を引き取れるが、大家さんによかったなとちょっと思ってもらえて、その世代の方たちは割と空き家に困っており、今、レスキューの半分くらいは口コミで依頼をもらっており、広告費と捉えてもいいのかなとも思うが、それを言ってしまうと元も子もないかなとか、そういうイメージでやっている。

青木氏) 東野さんが、今日循環ワークスの値札を見て、もっと値を上げてもいいのではないかと思ったと思うが。

山本氏) それはよく言われる。循環ワークスは、環境活動であり、回収に関してはゴミを減らしたい。今、ゴミを捨てるのと金がかかるので、それならば、我々がその捨てる直前に回収すれば、処分代も減るしゴミも減るから、引き取りますよという話。あくまでも有価物として無料で回収をしている。そして、例えば、補修

が必要な椅子であっても、補修をしてもらう前提で、破格で販売している。我々は、名前のおり循環させるのが目的であり、店に半年~1年は置きたくない。値段に関しては議論があるが、安いほうがいいと思っている。

青木氏) 確かに思想は反映しているいいと思う。これからのステージに、よっていくものだと思う。今時点の山本さんの考え方と、これから循環ワークスの取り組みをより多くの人に発信していきたいという言うときに、関わる人たちがサポーターからどんどん増えていく中で、彼らの雇用をちゃんと維持するとか、積み重ねたものがちゃんと価値になっていく。

私は、リビセンのものを買ったときに高いなと思ったこともあるが、買いたくなくなってしまうのは、リプロダクトの精神というか、そこに価値を感じるから。リビセンが関わってバリューアップさせたものに対して、払いたいと思うし、この一つのプロダクトだけではなくて、彼らの取組が、すべて見えてくる感じがしていて、そういう取り組みが増えたほうがいいよなと思えて、それならば高いお金払ったほうがいいよなと。パタゴニアなどにも通ずるものがある。それを買うことよって、自分はその活動を応援しているというか、ある意味では恩送り。その一つのものだけではなくて、その活動とか未来とかに対して、どうせなら投資したいという考え方。

東野氏) 私もリビセンのものは高いと思う。

青木氏) でも、高いものがつくれて、売れて回っているというのは、市場原理からしたらあるべき姿。

山本氏) 私は、やっぱり値上げをしたいが、あの値段で売れるのが現状であり、値上げする勇気がない。リビセンのものはきっちり管理されているし、我々は、まだそこまでできていないし、本当に持ってきたものをちょっと拭いて置いているだけ。リビセンのように出来たらいいなと思っている。

東野氏) リビセンのものでも、古材フレームとか 10,000 円くらいはしてしまう。無垢のフレームを買おうとすると、インドネシア産などであれば 3,000 円くらいで買えて、それと比べると 3 倍くらい違うし、高いなと思うけど、どこで誰がどういうものでつくられているかなどは、気にしなければ、無垢のフレームでいいと思うけど、原価計算してもどうしても合わせることができない。それが事業的には、作ったり、オーダーが入ることが嫌だなという気持ちが芽生えた時点で、終わりだと思うから、それはやらないようにしている。この値段じゃないと、自分たちがじり貧になってしまうし、この値段で売れなかつたらしょうがないから、この値段をつけるしかないという考えで値付けをしている。だから、買ってくれる人には本当にありがとうございますという気持ちです。

その値付けの仕方も、駆け出しの木工家の友人などに、ちゃんと一生懸命やれば 30,000 円くらい稼げるくらいのギャラを出して発注しているので、それを



15,000 円くらいでいいだろうと言えば原価は下げられるけど、それはやりたくないから、その原価はどうしてもかかってしまう。

青木氏) これらは、時間と関わりシロと自分がやってきたことの先に見えた世界など、いろんな複合要素によって変わってくると思う。すなわち、思想の部分はずっと変わらないから、やり方や価値は時々で変わってくる。ある意味、ちゃんと稼ぐということが大事であって、ちゃんと稼ぐからまちへ再投資ができるしエリアリノベーションにステップアップすることができる。東野さんの話の能楽堂は、ある人にとっては、最高に無駄な投資である。何をやるか先に決まっていなくてもかかわらず、とにかく建物の価値を守りたいから、自分がそこにビビッと来てしまったから、これは残さなきゃならないという使命感で始めたこと。そして、その能楽堂を作り続ける中で、もともとまちにあった「ますや」というゲストハウスが、コロナ禍で業態的に非常に厳しい状況にあった時に、東野さんが能楽堂を作って一棟貸しをやってくれることにより、彼らとしては、運営委託を受けることによって、今までのノウハウを使って稼ぎ口が、投資せずにできることが、まさに共助である。決してそれは無駄ではなく、それが逆に「ますや」がちゃんと存続することによって、まちの価値は上がるわけである。これからは、コロナ禍により、共助や共創がより強くなっていくと思っている。もちろん、コロナ禍により、伸びた業態もあるが、大打撃を受けた業態もたくさんあり、活かし合うというのは、それぞれのバリューのために、まちのために、これからすごく増えてくる活動だと思う。

東野氏) 「ますや」にお願いする運営委託費を、売り上げの何%とするかというところを切り詰めすぎず、ぎりぎりのラインでお願いをしているわけでもなく、ちゃんとお互いいいところに落とし込めるバランス感覚みたいなものが、エリアの場合は、建物を持っている人であったり、改修する人であったり、大きく動く人が倫理観を持っているとまちは変わりやすそうだなという気配を感じる。

青木氏) そういうかじ取りを持つ人が、変化し続けると思う。少し前までの時代では、一人のリーダーシップで、みんなついてこい、のような感じだったけど、今はそれぞれの強みを活かし合って、いろいろ生まれ始めていて、生態系ともいわれているけど、それぞれの場所で動き合って弱みを補い合って強みで助け合ってみたいな感じで、お互い余白を与え合う。ギブアンドテイクではなく、ギブアンドギブになってきている。地方の共創共助みたいな、その生態系の繋がりというのは、すごい武器であり、地方だからできることではないか。

新しい不動産会社と組むエリアリノベーションも、同じ志を持った不動産会社が現れたからそこに進めるが、詳しく聞いたらその方は70歳の方。

東野氏) 足腰悪くて二階に上がれない方です。諏訪では、跡取り息子より、社長のほうが、自分は話が合うのかなと感じている。

青木氏) 年代を超えて、同じ思いで組むというのもあるなと思った。

出村氏) 刺激的な話をありがとうございました。東野さんの話で、すごい華々しくやっているが所詮、全体を象とすれば、リンゴだという話。確かに、いろいろな動きは、リンゴに過ぎないことが結構あるんだなと思う。だからこそ、開いていくという思想が今風だなと思って、しかもそこに救いがあると。リンゴが日本全国各地方にバラまかれたとしたら、ローカルの力というのが新しい文化を醸成するので、加速度的に結構行くのではないかとなんとなくそんな気がする。

加藤氏) コモンズと言われるものを大切にしていって時代になるよねという話があって、例えばそういうのをやっているのが、秋田の五城目町の丑田さんがやっているシェアビレッジ。村というものをコモンズとして見るよりは、どちらかというところみんなでやろうとしている何かをコモンズとしてみて、お金を出し合って作り上げようよという考え方。二人がやられている話を聞いていても、地域にとってコモンズというかプラットフォームといういい方が正しいかどうか分からないが、そういうものが完璧である必要がない時代になったんだなと、完璧である必要がなく、人情味があって、東野さんが言っていた揺らぎというものがあるほうが、人が関わりシロがあるというか、常に完璧であろうと思う自分を反省しました。完璧であり過ぎるとついていけなくなってしまう。エリアリノベーションやリノベーションまちづくりは、そういう揺らぎというものが重要であり、みんなで守らないといけないんだよね、とか、ちょっと支えたいくなるような人のほうがいいんだなと思った。要は、完璧で俺についてこいっていう人より、みんなで支えたいくなる感のほうが、いいんだなというのが今日すごく感じたし、循環という話も、ゴリゴリにやるよりもやっている人たちを応援したくなるような人間味というのが、巻き込む力を持っているんだなと思い、すごく勉強になり、自分もそうしなきゃいけないと思った。

東野氏) 今日、はっとしたというか加藤さんの話の中で、おしゃれだから環境意識があるとのフレーズがあったが、ついにその時代に来たかと思って、昔環境意識が高い人はヒッピーだったと思う。無添加せっけん使ってますとか、化学繊維のもの使ってますなど、ヒッピーっぽい人たちがよりそういうのを好きで、身近にそういうものを置いていたけど、今、おしゃれな人がそういうものを身に着けたり、そういうブランディングでモノを売ったりという時代になってきたと、ここ1、2年でかなり進んできたなと気付いた感じがある。リビセンで古材を売り始めたころ、古材のあの感じが好きな人が古材を買いに来ていた時代だったが、今は、ゴミ減らせるいい建材ということで古材を買ってくれる人が増えているから、この流れがもっと追い風になって、当たり前になって、そういう配慮されていない建物とか取組みは、何か別の理由がなければ取り組めないような時代が来るとい話もあったので、面白い気付きだなと思った。うっかりすると応援している

政党が負けたりとか自分がやっている取り組みはすごくマイノリティーだなというのがあるが、もしかしたらちょっとずつマジョリティに向かっていくのかな、というのが話の中で持てた。

山本氏) 私もそのことが気になっていて、循環ワークスを見たことがある人はわかると思うが、一切おしゃれではなくて、とにかく土臭いし、トイレも仮設トイレで臭いし、何とかしてくれと言われるが、そこはバイオトイレにしたいし、自分が出したものの責任じゃないけど、本来のものってそういうもの。でもやっぱり、サポーターもそうだが、若い女の子が来たりとか、インスタ映えなど、おしゃれにオーガニックとか環境問題語っている子たちを実際はこうなんだよと変えたいと思って、いろいろおしゃれに作ろうかなと思っていた。しかし、今話を聞いて、このままでもいいかなと思えた。今のままで土臭く行って、路線を変える必要はないなと。私は、とにかく環境問題が好きでたまらない。自分の車は、てんぷら油で走っており、飲食店にもらった60ℓのてんぷら油でどこまでいけるかとか、信号待ちでアイドリングしているときの後続車は、てんぷら油でぶんぶんするので、そういうのが最高にたまらないし、とにかく気持ちいい。とにかく体験してほしい。よく、てんぷら油で走るんですかと聞かれるが、そもそもディーゼル発電機は、てんぷら油で発電できるように設計されているし、やっぱり知らないことを、私は環境問題を知っているから、知ってほしくて選択する考えを持ってほしいだけ。日々楽しみながら、汚い環境でやっている。

青木氏) やっぱり、みんなが違っていいと思う。リビセンに近づかなくてもいいと思う。循環ワークスはもはやオリジナルであり、東野さんにも見てもらいたかった。サポーター by リビセンではなくて、同じような人たちが出てきているんだという感触を感じてもらいたかった。

山本夫妻だからできることをやってもらいたいし、そこに集まる仲間の多様性でまた変化するかもしれないけど、ゴリゴリの男らしさは失わないでほしいと思う。我入道はもともと力強いまちだったと思うし、そこに受け入れられている山本夫妻の魅力みたいなのは、そういうところもあるんじゃないかなと思う。親和性というか、そういうのを大切に育ててほしいと思う。だからこそ、沼津の皆さんにお願いしたいのは、今はまだ、人のマンパワーとかいろんな事情があり、そんなに多くの時間を空けられていないが、さっきの話を聞いていると滞留させたくなく、なるべく早く循環させたいと言っていたので、日常の公園のように遊びに行ける場所にしてほしいなと思う。行って終わりではなくて、なんか行きたくなる場所になって欲しい。子供を連れていきたくなくて、眺めているうちに関心が変わるとか、そういう変化が生まれる場所に沼津の皆さんでしてほしいなと思う。

それでは、彼らの取り組みを会場のみなさんと分かち合えたことが、とても大

きなことだったと思います。こういう動きが諏訪や沼津だけではなくて、日本中のいろんな地域で、時代に求められているから、加速していくと思う。